



大粒でブランド力のあるいちごを

いちご王国とちぎ。長年日本一の座を守ってきた大黒柱は「とちおとめ」だった。だが、東京で大粒な新品種「あまおう」（福岡県）、「さがほのか」（佐賀県）など九州勢の激しい攻勢を受け、予断を許さぬ戦国時代に突入した。

何としても王座を守り抜かねばならない。「大粒でブランド力を打ち出せる際立った特徴のあるいちごが必要だ」。新たな目標を掲げたいちご新品種開発の挑戦が始まった。

スカイベリー誕生秘話（1）

砂漠に落ちた針を探す

新品種の生まれる確率は十万分の一。毎年交配実生を一万個体栽培しても十年以上を要する。実生苗をいくつ作れるかが早期品種開発のポイント。年に一万個体以上を栽培できる施設が必要だった。

平成十七年、県農業試験場いちご研究所に新しい育種用の温室が建てられた。それまで使っていた温室と合わせると二倍以上の面積となり、これまでよりかなり多くの株を植え付けて選抜できることになった。

いちごの育種は砂漠に落ちた針を探すようなものである。だが、その砂漠が小さすぎるとは勝負にもならない。事前の調査で、同じいちご生産県である福岡県では、栃木県よりも大きい規模で育種をやっているという情報はつかんでいた。これですべてと同じ土俵に上がれることになった。



選抜した実生数、10万株超す



平成17年に新設された育種用の温室

「新品種開発に大きく前進できる。研究スタッフは燃えた。」

さっそく、いちご研究グループのリーダー稲葉幸雄研究室長（現農業大学校教授）と育種を担当していた家中達広主任研究員（現農政部経営技術課副主幹）を中心に、グループ内で今後の育種と新品種開発の方針

について話し合った。さまざまな意見の中から、有望種系統の特性をピクアップして開発の方向性を絞り上げていった。具体的に動き出すタイムリミットが迫ってきていた。

大粒の新品種で勝負だ

「とちおとめ」が世に出て、十年が経過していた。福岡県に対抗して期待の星として誕生した「とちおとめ」は、いちご研究所が昭和六十年（一九八五）に開発した「女峰」と同様に、日本を代表する品種となり、主産県のシェアの三〇割を占めるまでになっていた。

栃木県は、平成元年（一九八九）に、十七年間維持してきた「いちご販売額日本一の座」を福岡県に明け渡した。その時、救世主として誕生、見事に王座を奪



スター」を選抜
するには最低で

回したのが「とちおとめ」だった。
しかし、長年いちご王国を支えてきた「とちおとめ」も、育成者の権利が切れるまで数年を残すだけとなっていた。天に輝く星のように、気の遠くなるような無数の種の中から交配して育成、一つの品種「ビッグ

も五〜六年の年月がかかる。「女峰」は数次の厳密な選抜をクリアして生き残った種の最終交配から五年、「とよのか」（独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構）は十年か



かった。
時間はあまり残されていないかった。

その頃、主要ないちご生産県の福岡県は「あまおう」、佐賀県は「さ

がほのか」、静岡県は「紅ほっぺ」といった「とちおとめ」より大粒な新品種を次々に育成していた。

「味の良さでは絶対に負けない」はずなのに、東京のデパートやスーパーではこれらのいちごの方が「とちおとめ」より高い値段で売られていた。研究スタッフは口惜しかった。

この苦境を跳ね返す新品種を開発しなくてはならない。いちご研究グループの話し合いの中で導き出された方向性は①「とちおとめ」より大粒で見栄えがする品種②生産者にとってもらえる収量性が高いもの③「とちおとめ」より病気に強いことが絶対条件だった。「これをクリアできる新品種が誕生すれば、生産者と消費者ニーズに合致してメリットがあり、必ず受け入れられる」。稲葉は、この三点を重点目標として育種を進めるよう家中に指示した。

ここから、栃木県産いちごの命運をかけた新品種開発への挑戦が始まった。

限られた期間の中で

家中は研究所が所有している数百種にも及ぶ品種とこれまで研究所で